

# ヨーロッパ中心の世界を生んだ大航海時代



15世紀末  
18世紀末

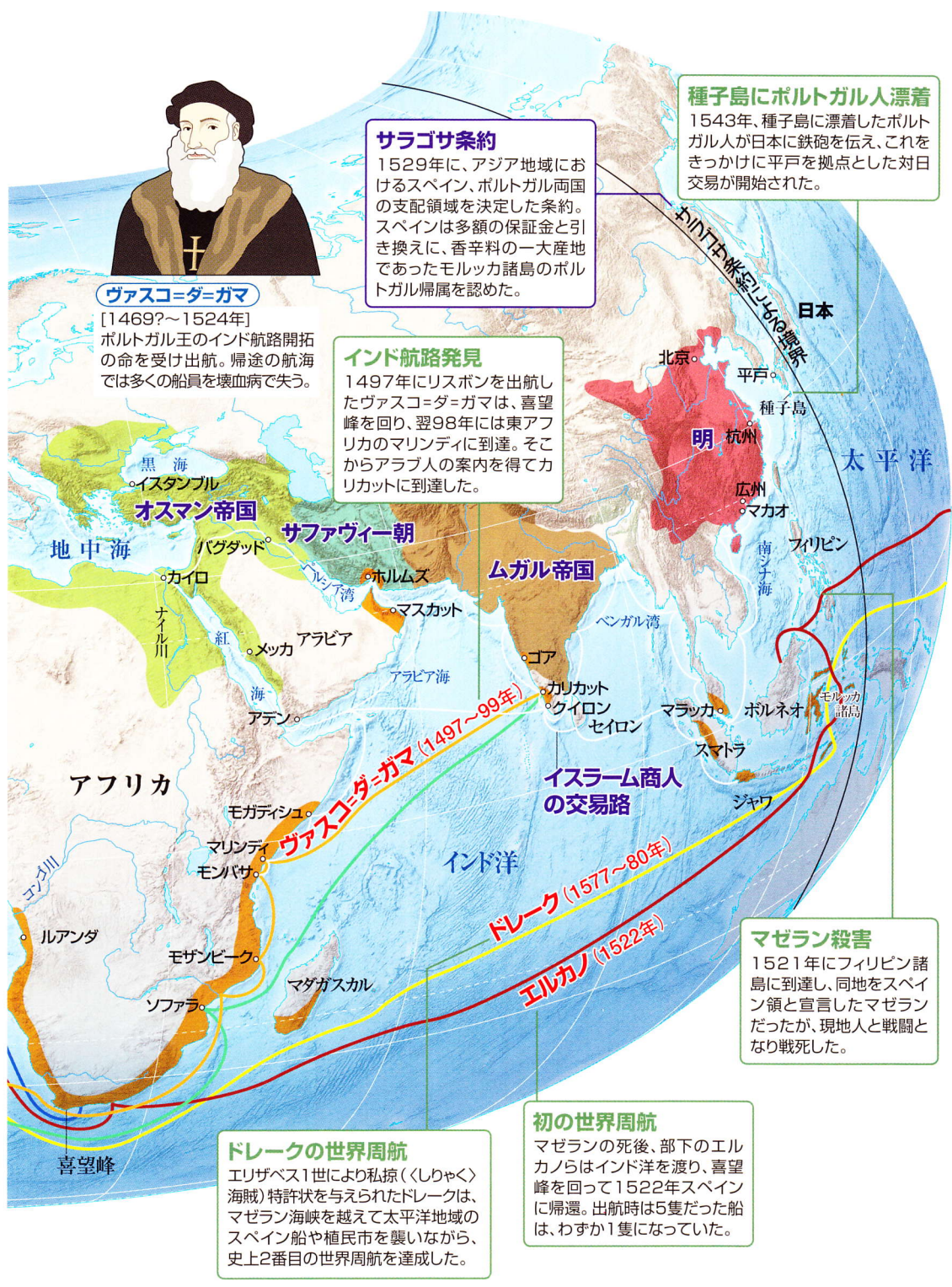
マルコポーロの『東方見聞録』などに描かれた東洋の富にあらがれを抱いたヨーロッパ諸国は、オスマン帝国の支配する陸路ではなく、大洋を渡って直接アジアを目ざした。

## イベリア半島から始まった大航海時代

十字軍（P 74 参照）やレコンキスタ（イベリア半島の再征服）など、さまざまな形で膨張の動きをみせていたヨーロッパ諸国は、15世紀後半以降、東洋の富に対するあこがれや当時貴重品だった香辛料を直接入手するため、次々と探検航海を試みるようになった。当時、ルネサンスを迎えていたヨーロッパでは、天文学や地理学の発達に加え、羅針盤の実用化などにより、大航海時代を支える技術的な下地も整っていた。

大航海時代の最初の主役となったのは、レコンキスタによりイベリア半島をイスラム勢力から奪還し、さらなる領土拡大を狙っていたスペインやポルトガルの王家であった。とくにポルトガルのエンリケ航海王子は、領土拡大に加え、アフリカ内陸部にいるといわれたキリスト教徒の伝説の王プレスター・ジョンと結んで、北アフリカのイスラム勢力を挟撃するという目的から、アフリカ西岸の探検を推進した。

エンリケの死後もポルトガルではアフリカ西岸探検が続けられ、1488年にはバルトロメウ・ディアスがアフリカ南端の喜望峰に到達。ついで98年にはヴァスコ・ダ・ガマが喜望峰を回り、インド西岸のカリカットに到達して香辛料をポルトガルに持ち帰った（P 86 参照）。



**種子島にポルトガル人漂着**  
1543年、種子島に漂着したポルトガル人が日本に鉄砲を伝え、これをきっかけに平戸を拠点とした対日交易が開始された。

**サラゴサ条約**  
1529年に、アジア地域におけるスペイン、ポルトガル両国の支配領域を決定した条約。スペインは多額の保証金と引き換えに、香辛料の一大産地であったモルッカ諸島のポルトガル帰属を認めた。

**インド航路発見**  
1497年にリスボンを出航したヴァスコ・ダ・ガマは、喜望峰を回り、翌98年には東アフリカのマリンディに到達。そこからアラブ人の案内を得てカリカットに到達した。

**マゼラン殺害**  
1521年にフィリピン諸島に到達し、同地をスペイン領と宣言したマゼランだったが、現地人と戦闘となり戦死した。

**初の世界周航**  
マゼランの死後、部下のエリカノらはインド洋を渡り、喜望峰を回って1522年スペインに帰還。出航時は5隻だった船は、わずか1隻になっていた。

**ドレークの世界周航**  
エリザベス1世により私掠（くしりやく）海賊の特許状を与えられたドレークは、マゼラン海峡を越えて太平洋地域のスペイン船や植民市を襲いながら、史上2番目の世界周航を達成した。

**ヴァスコ・ダ・ガマ**  
[1469?~1524年]  
ポルトガル王のインド航路開拓の命を受け出航。帰途の航海では多くの船員を壊血病で失う。



**コロンブス**

[1451?~1506年]  
イタリア・ジェノヴァの生まれ。  
サンタ=マリア号ほか3隻の船団を率いて新大陸に到達。

**コロンブスの新大陸到達**

コロンブスを使用したトスカネリの世界地図には、アメリカ大陸が描かれていなかった。そのため、コロンブスは死ぬまで到達地をインドだと思い込んでいた。

**カボットの北アメリカ到達**

1497年、イギリス王ヘンリ7世の支援を受けて出航したカボット父子は、同年北米大陸に到達。ニューファンランド島南岸などを探検した。

ポルトガルとその植民地  
スペインとその植民地

**トルデシヤス条約**

ポルトガルとスペインが新たな到達地における領有権を争うようになると、1494年にローマ教皇の仲介によりトルデシヤス条約を結び、互いの勢力範囲を確定させた。

**喜望峰到達**

ポルトガル王ジョアン2世の命を受け、1488年にアフリカ大陸の南端に到達。「カーボ=トルメントン(嵐の岬)」と名付けたが、ジョアン2世が喜望峰と改称した。



**マゼラン**

[1480?~1521年]  
世界周航以前に喜望峰経由で東南アジアを訪れていたマゼランは、西回りでフィリピンに到達した時点で地球球体説を実証したといえるかもしれない。

**初の世界周航**

ポルトガル王と対立したマゼランは、スペイン王の援助を受けて1519年に西回りによるインド到達に出航。彼の艦隊は史上初の世界周航に成功した。

**カブラルのブラジル到達**

ヴァスコ=ダ=ガマに続き第2次インド遠征隊の司令官としてポルトガルを出発したカブラルの艦隊は、1500年にブラジルに到達。同地をポルトガル領と宣言した。

早くから知られていた？  
**地球球体説**  
コロンブスは、地球球体説に基づいてイタリア人トスカネリらが作成した地図を信じ、西回りでインドを目ざす航海に旅立った。この地球球体説は、紀元前6世紀ごろにギリシアのピタゴラス学派によって最初に唱えられたもので、航海者や商人の間では早くから受け入れられていたとみられる。しかし、この説が実際に立証されるのは、1522年にマゼランの艦隊が世界周航に成功し、スペインに帰港することを待たねばならなかった。

**アメリカ大陸の「発見」と初の世界一周航海**  
一方、こうしたポルトガルの活動に刺激されたスペインでは、イサベル女王が西回りでのインド到達を目ざすコロンブスを支援。1492年、コロンブスは大西洋を横断して現在のサン=サルバドル島に到達した。彼はその後3度にわたり同地を探検したが、最後までそこがインドの一部であると信じていた。また、スペイン王の援助を受けたマゼランの艦隊は、1519年に西回りの航海に出発し、太平洋を横断してフィリピンに到達。22年に帰港し、初の世界周航に成功した。  
これらの航海の結果、大西洋、インド洋、太平洋を結ぶ新たな交易ルートが開拓され、それまでの地中海交易に代わって繁栄するようになった。また、こうした交易ルートの開拓は、世界の各地域を、ヨーロッパを中心とした地球規模の分業体制に組み込んでゆくきっかけとなった。